

Steel 鉄の点景 Landscape



国宝・籬菊螺鈿螺鈿時絵硯箱内に納められている和鉄。
源頼朝が後白河法皇より下賜されたものと伝えられている。
所蔵：鶴岡八幡宮

日常の中の精密品

鋏

古くからの生活用品の中で、鉄製のものの代表格は刃物。鋏も刃物の一種だが、包丁などに比べると人間の生活史に登場した時期はかなり新しい。構造がやや複雑で、手のこんだ加工や精密な細工が必要なため人間の知恵がある程度の水準にまで達した青銅器時代に入ってから現れた。2枚の刃の間で切るという基本原理は、まず羊の毛の刈り取りに始まり、やがて布、糸、金属、紙の切断、植物剪定などからカッターや工業用のシャーに至るまで広い分野で応用されているが、ここでは話を日用品の鋏にしぼることにする。

UとXの系譜

鋏といえば、和鋏というものを近頃とんと見かけなくなった。中央でU字型に曲げた両端に刃をつけたにぎり鋏とも呼ばれるワンピース型の鋏で、かつての日本では、布や紙を切るにはこのタイプのものが主流だった。2枚の刃をX型に交差させ鋏で止めたツーピース・タイプのものは、植木鋏、花鋏、板金鋏など硬い物専用の別種の鋏だった。布や紙用のX型鋏が造られ、使われるようになったのは明治時代になってからである。

和鋏というからにはU字型鋏は日本固有のもののように思われるが実はそうではない。両タイプとも源はヨーロッパである。U字型、X字型の発祥はそれぞれ古代ギリシャと古代ローマであるところから、ギリシャ型鋏、ローマ型鋏の別名もある。最初に使われるようになったのはU字型。BC10世紀頃の古代ギ

リシャで羊の毛を刈り取るために考案されたという。剃ったり抜いたりする方法で羊が暴れてケガをするのを防ぐための工夫だった。

ギリシャ型鋏はシルクロードを経由して、中国へと伝わった。6世紀頃の中国の出土品に銀製、銅製のギリシャ型鋏があり、裁縫用に使われたと推定されている。これが朝鮮半島を経て、やがて日本へも渡来したと見られ、古墳から同型の鋏が出土している。

一方、X型の鋏は古代ローマで生れた。現存するローマ型鋏の最古の遺品は、帝政ローマ時代(BC27年)のもの。刃が短く柄が長いもので、針金や鉛を切るためのものではないかと思われている。日本へはやはり中国、朝鮮半島を経て渡来し、正倉院の御物の中に、中国から輸入したものか中国系の帰化人の手になるものと目されるローマ型鋏があり、仏に供える花

を切るのに使われたとされる。

柔らかな物を切る洋鋏は15世紀頃、ヨーロッパ人が日本に伝えた。静岡県久能山の東照宮に徳川家康の手回り品の洋鋏があるが、これはポルトガル人の献上品であり、実用に供されたのは西洋医術の外科手術用鋏などの特殊なもので、明治に至るまで一般に広く使われることはなかった。

ギリシャ型鋏はヨーロッパでは羊毛剪定用を除き18世紀頃を最後に姿を消した。中国でも13世紀頃からは造られなくなったという。しかし、日本では、布、紙用にはこのタイプのものが造られつづけ、つい最近まで広く使われていた。このようにこの200年程は世界でギリシャ型鋏を使うのは日本だけとなったので、和鋏の名で呼ばれるようになったのであろう。

歴史の古いギリシャ型鋏が日用品の鋏としては日本を最後に今では世界的に使われなくなったのは、ギリシャ型鋏がかつて「馬鹿と鋏は使いよう」という言葉があったぐらいで扱いに多少のコツが必要であり使い方がやや難しかったのに比べ、ローマ型鋏は梃子の原理を応用しているので力も要らず使いやすかったからであろうと推測される。

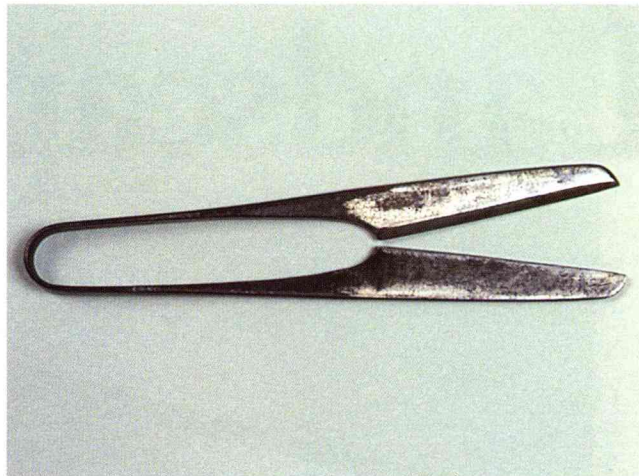
裏すき、反り、ひねり

さて、切れる鋏を造るには、「裏すき」、「反り」、「ひねり」と呼ばれる三つの要素が必要である。裏すきとは、刃の触れ合う側の面を少しくぼませることをいう。反りは2枚の刃を常に押し合う状態にするために刃を互いに内側に反った形にすること、ひねりは、刃の部分にプロペラのようなねじれをつけることである。この三つはいずれも、鋏が動いているどの時点においても刃先同士がぴったり接しているようにするためのものである。この三つがそろって適正な状態に調整されていないとうまく切れないか、初めのうちは切れてもすぐにだめになってしまう。鋏はこのような微妙にできているので、包丁とは違って素人が研いだりたりねじの調節をすると狂って使えなくなる。

鋏とは身の回りのありふれた品のようで、実は目に見えないところに精巧な工夫が凝らされた精密加工品なのである。

日本刀の技術の伝承

日本の鋏は材質技法を西洋の鋏と異にする独自の発展を遂げた。ヨーロッパ製は刃の部分も柄の部分も一体の鋼で造られ



大正期の和鋏

る。日本でも始めはこれを模倣していたが、明治初年頃から日本刀の製作技術が鋏づくりに導入された。廃刀令が出て刀鍛冶が失業し、包丁や鋏づくりに転じたからである。軟鉄に鋼を重ねる日本刀独特の技法を踏襲、和鋏はもちろん、指を入れる輪の付いた複雑な形の洋鋏でも槌一本で叩いて成形する優れた職人芸だった。後には、軟鉄に着鋼した刃の部分に焼鈍した鋳鉄を柄として溶接、型鍛造して仕上げる方法が一般に行われるようになるが、刃の部分の基本技法は同じである。これに柄の部分の感触、開閉の調子、切れ味など日本人の好みに適うきめこまかな改良が重ねられている。伝来技術を自家薬籠中のものとし独自のものをつくりあげる日本の優れた応用技術の一例といえよう。

このタイプの鋏は現在、縫製用の裁ち鋏として多く使われているが、一方、事務用、手工用などの鋏は、ステンレス板をプレスで打ちぬいて造るのが普通になっている。さらに最近では鋏でもナイフでもセラミック製の新製品も現れ、刃物の概念も変わろうとしているようである

■参考文献

- 紳士の文房具（板坂 元、小学館）
- 鋏読本（佐野裕二、新門出版社）
- 刃物雑学事典（橋本英文、講談社）
- 刃物のはなし（加藤俊男、さえら書房）

[取材協力・写真提供：鶴岡八幡宮、関市観光課]